

に生きてきた学友は、飢えと寒さにより衰弱していき、次々と無念の恨みを残しながらこの世を去っていった。

強運にも何とか命拾いをして引き揚げてきた私にとって、この方正での労苦の記録は、枚数制限のあるなかではとてもではないが、書き尽くせるものではない。誠に哀れで悲しい限りである。しかしながら出来ることならば、いつの日にか記録に残し、むなしく死んでいった学友の霊を慰めたいとも思うのである。

私がこの体験記を書いている机の上に、三人の孫の写真が置いてある。男の子二人に女の子一人である。

この三人が、私を見ていて、「お爺ちゃん！頑張つて」と言っているみたいである。そこでこの爺ちゃんは、また、一文字一文字原稿用紙の升目を埋めていかなければならなくなる。かわいい孫は、みんな平和な世に生まれ育つたのだ。

五十余年前、満州の山野に捨てられた子供たちのことを思うと、涙が出て仕方がない。あんな時代には二度としたくないのだが、今の人たちは、「そんな昔の

こと？」と言って、だれも平和の有り難みが身にしみていない。

「戦争は貧困をもたらし、貧困は謙虚さを生み、その謙虚さが平和をもたらす。平和は富を作り、富は慢心を生み、慢心は戦争を起こす」とは、ドイツの哲学者ガイラーの言葉である。忘れてはならない言葉である。

## 祖父・父・私の満州三代記

福島県 立花 実

はじめに

大正末期から昭和の初めにかけての日本は、経済不況のどん底にあり、特に東北の農村部では、そのうえに数年続いた冷害・凶作の追い打ちで、その日その日の食べることも事欠く有様で、口減らしのため娘を売るということも日常行われており、空前の生活地獄であった。そんな生活から抜け出すには、当時国策と

して鐘や太鼓で奨励された満蒙開拓者として広い満州に行くことが一番の早道であり、大義名分が成り立っていた。

そんな事情から福島県内からも大勢の人々が出掛けたし、立花一家からも次々に満州に渡っていった。一家にとっては、満州はそんなに遠いところではなく様子はよく分かっていた。戦争末期になって祖父や父が、一家を引き連れて満州に渡ったのもそんなに悲愴感はなく、「五族協和」、「王道楽土の建設」の旗印の下、理想とロマンに燃えての行動だったそう。

数多くの人が勇躍という言葉どおりの気持ちで満州に渡ったが、実際には大部分の人はその理想とは掛け離れた過酷な生活を強いられて、やっと生活もどうか落ち着いたと思う間もなく敗戦という悲劇に遭遇し、大いなる理想も夢も一瞬に崩れ、親子散り散り一家離散という悲劇な結果となった。立花一家もそのとおりで、何のために満州に渡ったのか、意味も無くなり悲劇だけが残ったのだ。

それぞれが、それぞれの運命に任せて今日があるの

だが、しかしその人々は、それぞれ言うに言われぬ思いを持ったままであろうと思うのだ。苦勞をするためにこの世に生を受けてきた祖父や父の悔しい思いが、このまま埋もれてしまうことは、私としては堪え難いことである。

私は、祖父や父のひ護の下に開拓団生活を過ごし、そして叔父、叔母に守られて引き揚げてきて福島に帰り着いたが、その様子はあまり記憶に残っていない。ただ、いろいろと当時の話を聞いていると、断片的に、その様子が朧気ながら浮かんでくる。それらの事を土台にして父から生前に聞いていたいろいろな話をまとめて、亡き人々の供養としたいと思って書き出した。

父は引き揚げてから、政府の戦後復興対策による農地開発の立法化によって、早速に福島の名山、安達太良山麓に入植し、再び開拓に取り組んだ。そして、逐次引き揚げてきた兄弟の親子を呼び寄せて共同開拓生活を始めたが、その間にあって両親をはじめとして兄嫁、姉妹などの縁者を多く亡くした悲しみは片時と

して忘れられないようで、何かという満州時代の話を聞かされていた。

その苦しい思い出を何とか残して、立花一家の若い者はもとよりその苦難に満ちた時代を知らない人たちにも知らせたい思いでいっぱいである。

この拙文により、多くの人たちが国策の美名の下にどうして満州に開拓団として渡ったのか、そしてそこで遭った戦争・敗戦の悲惨さ、無意味さを知ってもらい、平和の尊さをかみしめてもらえば祖父も父も喜ぶことだろうし、何よりの供養にもなることだろう。

#### 祖父の生い立ち

祖父、立花開助は、幼少の時から才知が優れていると村人から言われていた。そもそも立花家は、幕末のころ米沢藩の下級武士であった金作という人が、貧乏士族を返上して鑄掛職人となり、東北地方を鍋・釜の修理をしながら渡り歩き郡山地方に来て、そこで妻を娶り定着した。明治になり国営の「安積開墾」に入植して農業に従事していたが、「武士のなんとか？」で思うようにならず生活苦にあえぎ、借金をしては田地

田畑を減らしていた。何の因果かは分からないが、家族にも不幸や病人が絶えなかったらしい。

その三代目が祖父であるが、前に書いたとおり才知にたけていて、しかも素直な性質で一家の「希望の星」と言われていたとか。年少にして父を亡くし一家の柱となり、小学生時代から働きに出され、病弱だった母と多くの弟妹を抱えて苦労が多かったとのことだ。

奥山で丸太運びの「轆ひき」という危険な仕事で荒稼ぎをしたり、桑苗を各地に売り歩いたり、持ち前の気転と生来の商売上手により、何とか当時の立花の家の生活を支えていた。体格は小柄であったようだが健康で、結婚して「律儀者の子だくさん」というように十人の子宝に恵まれた。

人がよいので、弟や妹の家族も集まってきて、一時は十六人の大所帯となったこともあり、貧困を極めたが、それでも嫌な顔ひとつせずにごまかしていたのとである。

祖父は暴力否定の平和主義者で、軽妙でユーモアな

話を好んでしては、和やかな笑いを誘うというソフトムード的な性格であったが、その中にも芯の強さがあり、また、農耕に対する研究心もおう盛で合理的農業経営のグループにも入っており、村では篤農家とも言われていた。

村の農政にも参画して農事実行組合長をやっていた。しかし、名譽職には一切就かずに貧乏生活に徹して、粗衣はなはだしく「ボロ開助」と陰口されていたが、気品と威厳を備えており、村人からも一種の尊敬を払われていたとのことだった。

実は、当時の大槻村村長の陰の補佐役をしていたようであった。これは後年になって私が、村の古老から直接聞いて知ったことである。また、当時発足したばかりの郵便局の簡易保険の勧誘を請け負ったり、地主たちの世話役をかって出たりしており、村人からは異色の人と評されていたことも事実であったが、それでも貧乏と苦勞は死ぬまで背負い続けていた。

#### 父の生い立ち

そのような祖父や、家庭環境の下に次男として生ま

れたのが父、護まもである。

父は、大正五（一九一六）年三月生まれである。父の兄である開ひらくは、体が小さく病弱であった。それに比べて父は体格はそんなに大きくなかったが、がっちりとしていて健康で順調に育っていった。

生来の薬嫌いで、風邪をひいても薬を飲まず、祖父から無理矢理に飲まされると、すぐに吐いてしまい、「この野郎！ 死んでも構わないのか！」としかられていたそうだ。成長するに従い世間とは反対に、帽子も足袋も兄が「お下がり」をもらっていたそうだ。

家の手伝いでも農作業でも、兄よりも役に立つと褒められて威張っていたとか。

しかしある日、兄の同級生が学校の帰り道で、「お前の兄さんは青い顔をしているが肺病では？」と言われた。当時肺病は不治の病と言われ恐れられていた病気があった。友達からひどい事を言われたので兄がかわいそうになり、彼らが憎らしくなり、道端の肥溜よぼめに突き落とした。年上の子二人は肥溜めからほうほうの態ていではい上がり慌てて逃げていったこともあった

と、思い出を話してくれた。

そうは言っても、父はそんなに大きい体格ではなく平均以下であった。

貧乏暮らしの中では、栄養も満足にはとれずに、大きくなれるはずもなかったのであろう。

当時の家は小さくて、大風が吹くと今にも倒れるのではないかと心配させるほどで、そこに十六人の家族が住んでいたのが窮屈で、楽しさよりもつらさの方が多く、雨降りの日は雨漏りで座っていることもできなかったそうだ。

#### 戦前の生活あれこれ

この原畑部落は、みんな小作農家で貧しい生活をしてきたが、その中にもあっては立花家は、借金がかさんで最も苦しい家だった。それでも部落の中心部にあって比較的に威張っていたそうだが、それには次のような訳があった。

昔、旧米沢藩の藩祖、直江兼統が小藩で大勢の家臣を養うために、半農士族には屋敷内にウコギの垣根と果樹を植えさせて食糧の補助とさせた。安積に来てか

らも、この教えを藩祖の遺訓として忠実に守り、垣根にはウコギ、庭には柿・梅・梨等の果樹を植えていた。秋なると渋柿・甘柿二十数本の大木に実がたわわになつて「柿屋敷」とまで言われていた。部落の人々が、みんな集つて遠慮会釈なく自分の家の如くに食べていたので、人の心の温かさは当然と思つて育つたのである。

原畑部落というところは、精神的に平和な桃源郷であったが、それは祖父が理想家で、住みよい村づくりを推進していた結果であることは、だれもが認めていた。

父は、小学校では勉強も腕白も上位で、同級生の間では威張つて過ごしていたが、卒業すると早速に家の借金の身代わりとして、地主の家に下僕として働きに出された。本当は郵便局に就職する予定だったが、人使いの荒いと評判の大地主の家で、牛馬の如くにこき使われることとなった。そのときは開も別の地主の家に働きに行ったとのことだ。

昭和五（一九三〇）年ごろのことで、世の中は東北

冷害と世界金融恐慌の真最中で、そのうちに満州事變が起きた。

そんな生活をして五年を過ごし、家の経済再建に尽力した。その後、高王金山に就職し分析課で働き、やっと人並みの生活に戻った。

一家で渡満するまでのあれこれ

父は、昭和十一年の徴兵検査で甲種合格になったが、尺足らずで現役は免れた。しかし支那事變が本格化した昭和十四年五月には召集令状が来て、輜重兵として中支那に出征をした。一期の検閲の時、検査官から「銃の手入れの理由は？」と質問されたが、青年団の訓練のときに勉強していたことだったので、すらすらと答えて褒められた。しかし、検閲が終わって教育係の古兵から、教えもしなかったことを答えたと言って御目玉をくったが、それが原因で連隊本部勤務に回された。が、そのことが幸いして十カ月目に一選抜で上等兵に進級した。郷里の同僚も皆召集されていたようだった。

中支では、当時従軍慰問団にいた叔父の琴治が、浪

花節語りとして巡回慰問に来て偶然に面会したこともあったそうだ。

クリーク輸送で舟艇に手榴弾を投げ込まれたり、鉄帽とか飯盒とかに敵弾が貫通したこともあったそうで、後年それを随分と自慢に話していた。

昭和十七年六月に除隊となり家に帰った。

家の事情はすっかり変わっていて、兄も妹も満蒙開拓第九次福島県移民団として満州に渡っていた。いろいろと苦勞が絶えないようで、それを心配して祖父も祖母も元気がなく、病気がちであった。折角、三年余の戦地生活から無事に帰り、これから親孝行をしようと思っていたのにと腹立たしいことだったそうだ。

日本を取り巻く情勢はあまり芳しくなく、だんだんと暗くなってきた。しかし父が無事に帰ってきたことで、祖父母も健康を取り戻して元気になってきたそうだ。親類縁者も次々に満州に移っていった。六十町歩の大地主になった者もいたとか、いろいろな話が伝えられてきて、この時期になっても満蒙へのあこがれの夢は大きくなるばかりであった。満蒙開拓は絶大な大

義名分であった。

そのころ祖父は、戦時体制への村づくり奔走していたが、頼りとしていた岡部村長が急死して、この運動も頓挫してしまった。

活動の場を失った祖父は、「農民の尽忠報国の場は満蒙開拓だ！」という理念が昂然と沸き起こり、満州からのいろいろな情報を知るにつけても祖父の気持ちは奮い立つばかりだったそう。

父は、最初はあまり乗り気ではなかったが、日本のおかれている状況を考えるとき、安寧などどこにもない、家の運命は自分の双肩にあるのだと考えるようになった。そして、満州に行くということで親孝行が果たせるならばそれでよいと思ひ、祖父の考えに賛成することにしたそう。

#### 郡山分郷のあれこれ

工業都市であった郡山にも陸軍の施設が次々とできて、軍都の様相を呈してきたが、市政方針として満蒙開拓促進にも力を入れていた。東京などの都市から疎開してきた市民や、当時、非生産的な職業についてい

た市民を満蒙開拓に勧誘することを強力に推進していた。露店商の人たちもその標的になっていた。郡山市の露店商組合の親分のような立場にいた茅原孝一という人は、心身共にしつかりした快男児という表現にびったりとした人だったそうで、彼の一言でたちまちに大陸雄飛を決心した人々が集まった。

何百戸移住という計画の先遣隊は、あつという間に見通しがたった。

そんな時期に合わせたように、米軍機の空からの攻撃が激しくなってきた。一層大陸へ行こうという気持ち盛り上がった。

昭和十八年、第十二次満蒙開拓郡山分郷開拓団の先遣隊は、郡山駅から鳴り物入りの歓送を受けて勇躍出発した。

郡山分郷は、三江省依蘭県西阿地区にあって、満蒙開拓発祥の地とも言われたところで、あの有名な「土龍山事件」での飯塚連隊長戦死の場所も近くにあった。松花江、牡丹江、倭背河のデルタ地帯で山紫水明、風光明媚なる豊沃な地域にあった。

勇躍して現地に入った先遣隊の人々も、随分と苦勞をしたらしい。大部分の人は農業を知らない人だったので無理からぬことだが、そのうえ当時は、既に建設資材の調達も困難になり、指導機関の対応も適切ではなかったので余計に混乱したようだ。

良い話ばかり聞いて来た人たちは、最初から桃源郷であるかのように認識していたので、日常生活に不由な土地にたちまちに嫌気がさしてきたのだろう。今まで、すぐにも大地主になれるという心づもりでいたのが、現地に着いてみるととんでもない話だった。

団結して、あらゆる艱難辛苦に耐えて頑張るという覚悟がなく、また、他の開拓団から脱落してここに流れてきた人などの話を聞き、それを真に受けて気持ちに動揺をきたし始めていた。

他の先任の開拓団などのように、退役軍人の団長が軍隊式の組織と行動によって体制を維持しておればまとまりもよいのだが、茅原団長は快男児ではあっても、全く環境の異なる場では、思うような統制力を発揮することができなかったのだろう。気持ちばかりが

焦ってきた茅原団長は、本隊を引率するために一時帰国をしたが、有能な農事指導員を得ることも一つの大きな目的であった。農事指導員という職務は副団長格でもあった。

そしてその話を、すぐに祖父のところに持ってきた。

満州へ行くことに気持ちが沸いていた祖父は、たちまち意気投合し、十年來の知己の如くに固い盟約を交わし、両者共に家族全員を引き連れて郡山分郷に行くことが決まった。

#### 渡満後の生活のあれこれ

昭和十九年三月に、七人の家族は家財道具一切を処分し、二度と再び原畑部落には戻らぬ覚悟で郡山を後にした。もちろん父も親孝行のためと、母と乳飲み子だった私を連れて出発した。それは出征兵士を送り出すのと同じようで、部落全員の見送りを受けて盛大だったそうだ。尾羽打ち枯らして帰ってこようとは夢想だにしないことであった。家族一同これが郡山の見納めかと思うと涙が自然に流れ出てきたと、後に話し

ていた。

四月に佳木斯に着いた。一家はしばらくして郡山分郷に入り開拓生活の第一歩を開始した。

入植早々に開が訪ねて来て、思いつめたような気色で、「両親は、緑ヶ丘開拓団の自分の家に引き取りたい」と言ってきた。「北滿は寒いから初老の両親には耐えられないものがあるだろう。命取りになってはならないから！」と言って、心配して申し出たとのことだった。団長と対決してでも長男としての責任を全うしたいと意気込んでいた。

しかし祖父は、「茅原団長との固い約束があるから」と言って、その申し出を拒絶した。開はその言葉聞きながら、親父の性格からいって、これはいくら申し出ても承知しないだろうと思ひ、あきらめて悄然として帰っていった。このとき、祖母は孫に何か買ってやれと言って二十円を渡した。祖父はその後、筆架山や緑ヶ丘を幾度か訪問したことがあったが、祖母はこのときが永遠の別れとなった。

郡山分郷の開墾地は農地については好条件の揃った

農耕地であった。しかし、現地人との融和はなかなか思うようにはならなかった。

こんなこともあった。

入植早々のことだったが、現地人が葱を売りにきた。各家から人が出てこの葱を買ったので、たちまちのうちに売り切れてしまった。現地人は売り切れたので喜んでいたが、いつまで待っても代金を持ってくる人はいない。彼は啞然として立ちつくしていた。父が各家を回って支払いを催促すると渋々と出したので、それを渡してやったら安心して三拝九拝して帰っていったということであった。

父は軍隊時代に三年間中支にいたため、中国語を少し話せたので、現地人との話し合いはなんとかできていた。そのためか現地人からは、「立花さん、立花さん」と呼ばれて、「立花さんだけが話の分かる日本人で、良い人だ」と言われて信用されていた。事実そのとおりであった。だんだんと周囲の事情も分かってくるが、驚いたことには、現地人の住まいはなんとか雨露をしのいでいるが、昨年一年は農作物の収穫はほと

んどなく、賃金も払ってもらえず、食糧の配給も受けていなかったということだった。

先住の団員の中には、他の開拓団から追放されてきた人もいて、あまり働く意欲がなく、山菜採りや魚釣りなどの遊びの方に力を入れていたり、現地人いじめにうつつを抜かしていた人もいたようで、概して団内の空気は緩んでおり悪かったようであった。

そこで祖父は、農事指導員ということで、「指示に従え、従わない者は追放する」という厳しい命令を出していたそうだ。そしてそれを父が、戦地帰りという貫禄と度胸でもって、体を張って範を示すこととした。祖父も父の行動を随分頼りにしていたそうだ。

現地農法は勝手も違い、農具も異なっているのに、自信を持って指導ができず、指示も思うようにはならず、現地人の指導を受けながらの指示で切歯扼腕の様子だったそうだ。しかし、だれもが差し迫った生活を安定させる努力はしなければということは分かっているのに、怠けたり油断したりしてはおれないという気持ちにはなってきたそうだ。

野菜などは経験をもとにして何とか作れたが、何よりも肝心なのは、日本人として必要欠くことのできないう米作りをどうするかということだった。春・夏期の短いこの地方で、荒地に田型を作り、水を張って種籾をまく農法では、水面の維持も大変だが、それよりも、折角発芽しても小鳥の大群が押し寄せてたちまちのうちに食い荒らしてしまう。そして雑草がすぐに繁茂するので、それを取り除くとまた、小鳥が食べにくるという繰り返しだった。祖父と父の焦りは高ずるばかりであった。それはそれは、祖父も父も大変な苦労をしたようだ。これを克服するには、旺盛な責任感しかなかった。そんな苦しみも分からずに、他の人たちは人頼みが普通の状態になっていて、困ったら団本部がなんとかしてくれるだろうとか、拓殖会社が助けてくれるだろうと、他力本願の無責任な風潮が蔓延していた。

広大な畑は一部を除き、大部分が荒れるに任せていた。現地人が一生懸命に耕して作った畑作物を荒らすことは、平気でやっていた。開拓団は武器を持ってい

なかったので抵抗しなかったが、内心は悔しい思いをしていたに違いない。それがあの敗戦になってから現地人が暴徒化した最大の原因であつたらう。

およそ、他の開拓団はどうなつていたか知らないが、後年、引き揚げてきてからの思い出話の節々にも、遊んだことや現地人をいじめたこと、生活が苦しかったことだけを取り上げて話題としてゐる人がいるが、「国のため」とか「五族協和のため」とか「王道楽土の建設」とかの理想は何だったのか、反省させられることが多いが、郡山分郷だけの問題だったのかと思ひ悩むことがある。

現地人が、葱や韭の早出しだけをやつてゐるので、夏秋野菜の温床促成栽培のヒントを教えたら、後になつて教授料を持ってきたのには驚いた。

#### 敗戦前後のあれこれ

昭和二十年になつて、祖父は後続団員の募集のために福島県に一時帰郷したが、もう戦争も末期状態で募集も困難であつたらしい。道中が危険だからこのまま村に残りなさいと真顔になつて引き止められたりした

そうだ。祖父は、「そうもいくまい！」と袖を振り切つて帰国したとのことだった。

この年の初春には、依蘭街に熊が出没して人を殺傷した騒ぎが起きたが、現地人に言わせると、「日本人がきたからだ」とのことだった。

当時、関東軍は東満の広い地方を特別地区としており、武装移民団の団員は召集しないということだったが、その約束は破られて「根こそぎ動員」が始まつた。郡山分郷の男たちも次から次に召集されてしまつた。

六月になつて、とうとう父にも令状がきた。家族一同声もなく見送つたが、これからが悲劇の始まりとなつた。

出発の途上、日ごろ親しくしていた現地人数人が父の腕を引っぱつて呼び止め、小声で「日本は負ける。だから兵隊には行くな。立花一家だけは、我々で山の中に隠してでも守るからここから逃げろ！」と言つてくれたそうだ。父は彼らの温情には感謝したが、「日本人だから、そういうわけにはいかない」と、よく話

をして別れたとのこと。

父はそのまま奉天の臼砲隊に入隊したが、臼砲隊と言っても名のみで、砲はもとより銃も弾もほとんど無かったそうだ。

八月九日には、全満州が戦場となった。そして十五日の敗戦。部隊は即時解散となり、家族の身を案じてすぐに郡山分郷に戻るべく行動を起こした。なんとか新京までたどり着いたが、もう既に新京駅は奥地からの避難民で混雑を極めていて身動きがとれずに、しばらくの間、情報を得るためにとどまってしまった。そのうちに、依蘭県地域の開拓団も移動を開始し南下しているとの噂が入ってきたので、必ず新京で会えるだろうと確信して新京で家族を捜すこととした。

#### 一家避難行のあれこれ

祖父を長とした残された家族は、団本部からの避難命令により郡山分郷を離れることとなった。

鉄道に頼ることは困難だったので、松花江を利用してハルビンに向かう決意をしたが、その時点ではもう既に船便も途絶えていた。金を少しばかり出してでも動

いてくれる船はなく、船頭は法外な要求をしていた。

こうなったら歩いて行くしか方法がなかった。歩いて避難する準備のため、一度、出発地に戻った。そこで日本が負けたというのを聞き、みんなは呆然としてしまったが、こうなったらなんとしてでも日本に帰らなければならぬと話し合った。

依蘭埠頭を出発してからしばらく歩いていくうちに現地人の部落があった。その部落を通り過ぎようとしたときに後ろの方で銃声が聞こえた。びっくりして立ち止まったら、現地人が鍬や鎌や混棒を持って追い掛けてきた。逃げ惑う人たちを叩き、着ている物や持っている荷物を次から次と奪い取って喚声を上げていた。

祖父の決断で、この場から逃れるには持っている荷物を渡さなければ駄目だということで、暴徒に向かって投げ出したが、暴徒はそれの一つ残らず拾って帰っていった。「命あつての物種」というのはこのときのようなことを言うのだからと思つた。

衣服も食べ物も失った一行は、他の多くの避難民と

共に、道無き道や湿地帯や小高い丘などを歩き回った。「ハルビン、ハルビン」と口では言うが、どこがハルビンなのか、どっちの方向がハルビンなのか分らずに、ただ人の歩いて行く方向に遅れてはなるものかと必死で追い続けるだけだった。途中で歩けなくなった病人や老人・子供がばたばたと倒れてしまった。そのうちの多くの人は銃で撃たれるか、薬を飲んで自ら命を絶っていた。

飢えをしのぐため山に入ると、山ブドウの葉や、木の実をとって食べ、平地になると現地人の畑に入っは、トウモロコシやじゃがいもなどを採って生のままかじった。こんなところを見付かったら大変で、それを殺されてしまうので、交代で見張りをしながら採っていたとのことだ。

死ぬような苦勞をしながら、どうにか牡丹江まで行きついた。

雨の降り続いた牡丹江の水位は高まり、濁流がとうとうとして流れていた。どうやって渡るか祖父たちは集まって相談をしたが、暗いうちはどうにもなら

ず、そのまま野宿することになった。

夜が明けて流れを見たら、人間の死体や牛馬やその他の家畜の腐乱体がびっちらと浮いていて、それが少しづつ流れていた。まともに見ることは出来ない有様であった。

そこには兵隊さんたちも大勢いて、年寄りや子供をおぶったり手を引いたりして河を渡していたが、その他の人は兩岸に張った綱をつたって渡った。女の人にも、恥ずかしいとか外見が悪いとかは言っておられずに、着物を全部脱いで頭の上に乗せて丸裸になって渡ったとのこと。

それから歩くことは続いた。一緒に歩いてきた人も次々と倒れてしまい、その死体を葬りながら、夜を日に次いで歩き続けて、数十日をかけて方正街に着いた。

やっとの思いでここまでたどり着いたが、まだまだ前途は程遠く、これからが今まで以上に多事多難で難行苦行の避難行だという話で、力尽きてしまった幾千人という大勢の避難民が、この方正街の飛行場だった

ところにある収容所に集まってしまった。

病氣と飢餓、それに酷寒期に向かっていている時期でもあり、毎日ばたばたと死人が出た。各避難民団の幹部連中が相談して、ハルビンに救助の請願連絡をしたが、それがどこまで届いたかも分からず、救助の手はいつまで待っても差しのべられなかった。

さすがに気丈な性格の祖父も、ここまできて責任の重さと体力の衰弱に憔悴してしまって、家族に見守られながら波乱に満ちた生涯を終えて異国の土となった。さぞ後ろ髪を引かれる思いであっただろう。祖父の死後、すぐにその後を追う如くに祖母も死んだ。なんの弔いもできないままであった。

とうとうここ「方正伊漢通収容所」で越冬することとなったが、翌春までの間に、大叔母、父の弟妹など計八人が死んでしまった。その中には生まれたばかりでまだ名前もついていない者もいた。

当初、幾千人といいた避難民も一冬が過ぎるころになると、数えられるくらいの人数になってしまった。

お金のある人や丈夫な人は、みんなハルビン目指し

て去っていき、残った者の多くは餓死、病死をしてしまった。中国人の家に保護を求めてそのまま居着いてしまった人も数多くいた。

雪が溶けたすと幾百とも知れぬ死体が、山の如くに重なりあつて現れてきた。

その後の父の行動あれこれ

新京で家族たちと会えることを期待していた父は、その後、筆架山の兄嫁の実家、佐藤家の人たちや、緑ヶ丘の兄嫁たちとも会うことができた。開は召集されてシベリア行きになつたらしかった。

ソ連軍による男狩りが厳しくなつてきたので、それから逃れるためにみんなと一緒に南下をすることとした。その避難行も苦勞の連続だったようで、引き揚げてきてからもあまり多くは語らなかつた。

途中で、兄嫁一家ともはぐれてしまった。

妻や子供にも会うことができなかった。途中で病氣になり、しばらく入院していたが、医者や薬があるわけでもなく、一時は生死の境をさまようような状態であつた。

昭和二十一年六月に病院船に乗せられて日本に帰った。幸いに妹の京も病院船にて一緒に帰国することができた。福島に戻り、叔母の家にひとまず落ち着き、静養をしながら家族の引揚げを待った。

私たちの引揚げあれこれ

私はまだ三歳だったので、家族の手で守られており、どんな苦勞があつたのか、それをどうして克服していたかあまり記憶に残っていないが、母は随分と苦勞をしたのだらうと思う。中国人の家に働きに行つてわずかの賃金を得て、それを持って食糧を求めて私に食べさせてくれた。母とは引揚げ前の混乱の中で、散り散りになり、とうとう一緒に引き揚げることができずに、苦惱の末に現地に残留をしてしまった。

引揚げ後の生活あれこれ

父は、しばらく叔母の家にいて体力の回復を図り家族の引き揚げてくるのを待っていたが、政府の施策に応じて安達太良山の麓の開拓のために入植し、立花家再興のため鎌をふるった。

一緒に引き揚げてきた妹の京夫妻も呼び寄せて力を

合わせて開墾に精を出した。祖父の果たし得なかつた夢を実現させるためにも努力をした。そのうちに一番下の弟も義勇軍から引き揚げてきたので新たな戦力として期待したが、もう開拓は嫌だと言つて東京に就職してしまった。昭和二十四年には、シベリアから帰つた開も入植し、兄弟妹の四戸が隣り合つて働いた。

父は立花家再興をこれから生涯の念願としており、二十余ヘクタールの土地を開拓して生活の安定を図り、満州で雄途むなしく散つていった故人たちの供養に余生をかけていた。その後、中国残留日本人となつていた母が帰国したが、中国人と結婚し子供もできたそうだが大変な苦勞をしたことであろう。

引き揚げてからの私

父は、昭和六十年十二月に脳腫瘍で六十九歳の生涯を終えた。父はどちらかと言えば小柄であつたが、兵役に服し弾の下をくぐり九死に一生を得て除隊、これから親孝行ということで祖父に口説かれて、開拓団として満州へ移り祖父の片腕となつて国策遂行に全力を傾注していたが、再度兵隊に行き、幸いにもシベリア

送りにならず引き揚げたが、その心身共の苦勞は並大抵ではなかつたらうと子供の私にもひしひしと身にせまるものがあつた。

そんな父を尊敬しながら、私は苦しい日常生活を過ごしていたが、幸いに、母に似て体は父よりも大きく力もあつた。負けん気は父並みだつた。父は学校に行かせる心づもりであつたらしいが、私は「おやじのあとを継ぐには学問はいらぬ、実業でやっていく」という決心で、大工の学校に入り建築業に進んだが、祖父や父の影響を受けてなんでもやってみたく、建設機械の運転士、植木屋などの仕事をやっている。

あの戦前の日本が、もっと平和主義的な生き方をしていたら、立花一家の生き方も変わっていたであろう。あの農村の疲弊がなかつたならば、満州開拓などには行かなかつたであらうし、一家眷族が散り散りになることもなかつたであらう。

祖父、父の生涯を振り返ってみる時、諸手を挙げて時代の流れに乗ってしまった結果の悲惨さをしみじみと感ずるものである。

私は、それからみるとこの平和な時代に人生の大部分を過ごしていることを何よりの幸福と思ひ、その平和を大切にしていくなめの努力を続けたいと思つてゐる。そしてその反面において、祖父、父の生きざまに對しては心から敬意を表すものである。

## 私の半生記

福島県 秋山 ハルノ

私は、福島県の安達郡玉井村にて農業を営んでいた平栗勝衛の長女として、大正六（一九一七）年に生まれた。父は体格が特別に良く偉丈夫であつた。兵役も甲種合格で、仙台にあつた野砲兵連隊に入り数年の軍隊生活を過ごして除隊し、すぐに結婚した。私は、男二人、女四人の六人姉弟妹の長女であつたが、私だけが父に似て体格が特別に良かった。母は体も小さく弱かつたので、私は小さいときから父を助けて農作業を手伝つたり、家事をしたりなど精いっぱい働いてい